

日本書紀“神武天皇の東征”はどのように行われたのか

1. はじめに

先月、日本書紀について学びましたが、神話の部分で最もドラマチックで重要な“神武天皇の東征”について出来るだけ判りやすくまとめました。

初代神武天皇となるカムヤマトイハレビコノミコト(以後 イハレビコと記します)は、天照大神から 5 代目に当たり正当な家系に 4 男として生まれました。幼い頃から文武両道で、兄たちを超えて 15 歳の時皇太子となりました。

この東征は 6～13 年(日本書紀説・古事記説)かけて行われましたので、少し長い資料となりますが辛抱してご覧ください。(ゆかりの地の解説と写真は私が 3 年前これらの地を訪ね学んだものです)

●「皇子原神社」…… 神武天皇(イハレビコ)生誕の地。。

天孫降臨の地とされる“高千穂の峰”の麓に、古墳群を含む自然公園にあり古く苔むした階段を登るとお社がある。小さいお社だが、屋根には“千木”も“鯉木”ものせられてる。社の後ろには「産婆石うべし」と呼称される神石が祀られている。



●「狭野神社」……神武天皇が 15 歳まで育った地(イハレビコの御幼名 狭野命)美しい姿の高千穂の峰が望める所に鳥居が立ち、杉木立の間を抜けると、宮崎神宮の別宮である社殿が現れる。

この辺りは、昔から火山地帯で稲作に不向きでかろうじて「狭い農地」で細々とコメを作らざるを得なかった。神武天皇は広々とした地で稲作をし、自分の家族や民に食べさせたいとの気持ちが東征につながったようである。

(参考地)

平和台公園の平和の塔

昭和 15 年神武天皇即位紀元(皇紀)2600 年を祝うため「八紘一宇」の精神を体現した塔を神武天皇ご縁

の地宮崎に建造した。工事には中国・台湾・朝鮮など内外から石材を集め、延べ約6万人の労働により昭和15年11月25日に完成した。

戦後昭和21年にGHQの命により、太平洋戦争に結びつくとして「八紘一宇」の碑文と武人の象徴であった荒御魂(あらみたま)像が撤去された。

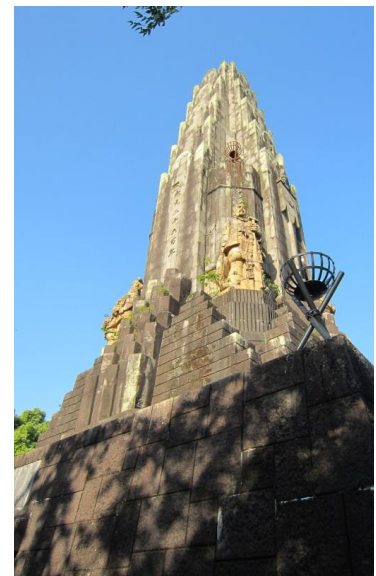
昭和40年に保管されていた「八紘一宇」の文字が正面に復元された。

四方に 武人である「荒御魂(あらみたま)」、
商工人である「和御魂(にぎみたま)」、
農耕人である「幸御魂(さちみたま)」、
漁人である「奇御魂(くしみたま)」の
信楽焼の四神像が配置されている。

神武天皇が述べた「八紘一宇」という言葉を、陸軍が戦意高揚のために利用したため「八紘一宇」があたかも太平洋戦争を招いたと考えられた。神武天皇のお考えは、世界の人々が家族のように互いに助け合い平和に暮らせるよう願ったもので戦さのためのものではない。



神武天皇東征の経路



平和の塔

2. 東征はどうして行われたのか

「古事記」の神武東征神話によると、日向の国<宮崎県>の高千穂宮にいたイハレビコは45歳の時、兄の五瀬命(イツセノミコト)達と「どの地を都とすれば安らかに天下を治められようか」と相談しました。ある翁の言うには、東の方で国の中央に位置し青山に囲まれた広くて美しい国がある、そこが相応しい場所だと提案した。イハレビコは日向の国は平地が狭く稲作を広めるのに適してないと考えていたのでその意見を採用する。そして東方を目指そうと3人の兄・皇子を始め多くの人を従え日向を出発します。

●日向一宮 都農神社

イハレビコが宮崎高千穂の宮を出立した折り、この地に立ち寄り“国土の平安”、“海上平穩”、“武運長久”を記念し祭神を祀った。

●美々津・立磐神社

イハレビコが東征にあたり、美々津港から船をだされた、その時この航海の安全を祈念した。境内には「神武天皇御腰掛の岩」があり、玉垣を巡らしている。

神社の入り口には「海軍発祥の地(米内海軍大臣書)碑」が立つ。



立磐神社



海軍発祥の地(米内海軍大臣書)碑

途中、宇佐<大分県>、筑紫(つくし)<福岡県>、安芸<広島県>、吉備(きび)<岡山県>を経て瀬戸内海を東に進んで浪早(なみはや)今の大阪に至った。

●宇佐神宮(全国4万の八幡社の総本宮)

日向から船出したイハレビコがこの地に上陸、宇佐の国造から歓待を受けた所。宇佐は神代に“比売大神”が天下られた所で、もともと天上の神が崇拝され、応神天皇を主祭神として祀り、皇室では伊勢につぐご先祖の神社とされてきた。特に勅使の和氣清麻呂に国体を正す新教を授けた事が有名。



イハレビコが国造から歓待された所



宇佐神宮拝所

●北九州 岡田宮

古事記ではイハレビコが1年間この地に滞在された、また神功皇后が新羅征討の時視察されたと記されている。ここには、日本神話の事が詳しく紹介されている米国の中等教育用社会の教科書が保管されている。その教科書には、日いずる国・神々の国・日本の誕生・今上陛下が神武天皇の第125代に当たることなど詳しく載せられている。



当神宮から出土した五世紀頃の青銅製の鈴“環状の三鈴”

●広島 多家(たけ)神社

主祭神は神武天皇と安芸津彦の命。イハレビコが東征の途中、“汐どまりの地”として立ち寄り宮(えの宮)を造り7年滞在された。神社の森は、神武天皇が上陸した時、当地の者に「曾は誰ぞ」と尋ねられた事から、「たれその森」と呼ばれる。

●吉備高島宮址

田舎の小高い丘の藪の中の荒れた階段を登ると小さな社と石碑がある。イハレビコが長く滞在し稲作の造り方を教えたとの事だ。

3. 初めての戦いに大敗

大阪河内国で土着の豪族“長脛彦(ナガスネヒコ)”の抵抗に遭い大敗し今の和歌山に逃れる。その戦で兄の五瀬命が矢を受けて、出血甚だしく崩御され、竈山(かまやま)の地<現・和歌山市和田の>に葬り申しあげました。

●水門吹上(みなとふきあげ)神社

イハレビコ東征で初めての戦いに敗れ、兄の“彦五瀬命”が流れ矢に当たり崩御されたと言われる旧跡である。境内に「聖蹟記念碑」が建っている。(空襲で一部焼けた後がある)

●竈山神社(かまやま)

長脛彦群との戦いは激しいもので、今の大阪湾は血で真っ赤となり“血沼海(ちぬのうみ)”と呼ばれた。ここで亡くなった“彦五瀬命”はこの竈山神社に葬られた。兄は亡くなる前、イハレビコに「我々は太陽の子なのに、太陽に向けて矢を打ったから敗北した。攻める場所を変えるように」と言い残した。

こうして五瀬命を失った皇軍はこの後さらに軍を南に進め紀伊半島熊野 地方へと向かいます。一行が船で進もうとした時、海上で突然暴風雨に遭遇して、船団は漂流しました。その時、イハレビコの

二人の兄は嘆かれて「ああ何としたことだ。わが祖先は天神(あまつかみ)、母は海神(わたつみ)であるといふのに、どうして私達を陸で苦しめ、また海で苦しめるのであろうか。」と仰せられ、言い終わるやそのまま剣を抜き、海に身を投げられました。二人の兄は現・新宮市王子の王子神社に祀られています。こうしてイハレビコはただ一人、長男と軍を率いて進み熊野に上陸します。

●熊野速玉大社 熊野三山のひとつ

熊野大神が“神倉山”に降臨しその麓に初めて宮殿を建てたことからこの地を“新宮”と号された。熊野権現として人々の過去世、現世、来世を護る慈悲深い神と崇められる。御神木の“なぎ”道中安全の印として落ち葉を戴く。

●楯ヶ崎(イハレビコが長男とともに上陸された場所)

松崎港から遊覧船に乗り楯ヶ崎を目指す。約1時間強。途中、神秘的な“青の洞窟”や“柱状節理”の岸壁などがある。



熊野速玉大社



イハレビコが上陸された海岸

●阿須賀神社 神武天皇聖蹟狭野顕彰碑

楯ヶ崎 (イハレビコが長男とともに上陸された場所)また、この地は秦の始皇帝の命で、不老不死の仙薬を探し当山に参った“徐福”が住み着いたところでもある。



●熊野那智大社

イハレビコが熊野に上陸し、那智の滝に大己貴神を祀り八咫鳥の案内で山々を越えて大和に入られた。500段もの階段を登ると6棟からなる朱色の社殿が目をはく。イハレビコを大和に案内した八咫鳥は、この社に戻り疲れて死んだそうだ。“烏石”として祀られている。

●熊野本宮大社

全国の「熊野神社」の総本宮。

神代の時代、この熊野の地を治めた天孫系の神によって創立されたのがこの本宮で、それは熊野の大神の神遣いが太陽の化身“八咫鳥”である。熊野信仰は“太陽の黄泉がえりを願う祭礼である。



熊野那智大社の八咫鳥



熊野本宮大社

ここからの進軍でも新しい敵が幾度も現れますが、天照大神からの授かりもの【布都御魂(ふつのみたま)が宿る剣】<現在は天理市の石上神宮に鎮座>と「八咫鳥(ヤタガラス)」の先導により、熊野川をさかのぼり、山中を迷うことなく無事吉野に至り、そこから宇陀(うだ)<奈良県中東部>へと進みます。そして、さまざまな戦いを経てついに太陽を背にして、宿敵である「長髓彦」と相まみえました。「日本書紀」によりますと、このとき金色の光を放つ鶉(とび)が飛んできてイハレビコの弓に止まり、その光に目がくらんだ長髓彦軍は戦わずして敗れ去ったとあります。そこで、畝傍山(うねびやま)東南の白檮原宮(かしはらのみや)<現・奈良県 橿原市>で初代・神武天皇として即位されました。そして皇后として媛蹈鞯五十鈴媛命(ヒメタタライズズヒメノミコト)を迎え、三人の御子をもうけました。



神武天皇像

● 橿原神宮

高千穂で政治を行っていた神武天皇が、天照大神の御心を更に広げる為東遷の旅に出られ、6年の歳月をかけ数多くの苦難を乗り越え、ついに畝傍山の麓に宮殿を造り第一代天皇となられた。明治22年、この建国の偉業を達成された神武天皇を敬い神社創建の動きが起こり、明治天皇から京都御所の内侍所を本殿、神嘉殿を拝殿として下賜された。

今年は神武天皇即位2,680年、橿原神宮創建130年に当たる。これを記念として、上皇陛下からは“銅鏡”を賜った。(八咫鳥・畝傍山・太陽・陛下の紋の桐があしらわれ、容器は漆に見事な螺鈿細工がされているが、撮影禁止でした)



橿原神宮（筆者が描いたものです）

令和2年5月20日
歴史探訪の会 内海春樹